

## 筑前野間焼について

筑前野間焼は福岡県福岡市南区皿山2丁目にあり、現在では岡本光山氏経営の岡本窯1軒が操業を続けている。ここでは採集された野間焼の紹介を含め江戸時代後半期に起きた一手工業としての歴史的推移に触れてみたい。(註1)

### 文献資料

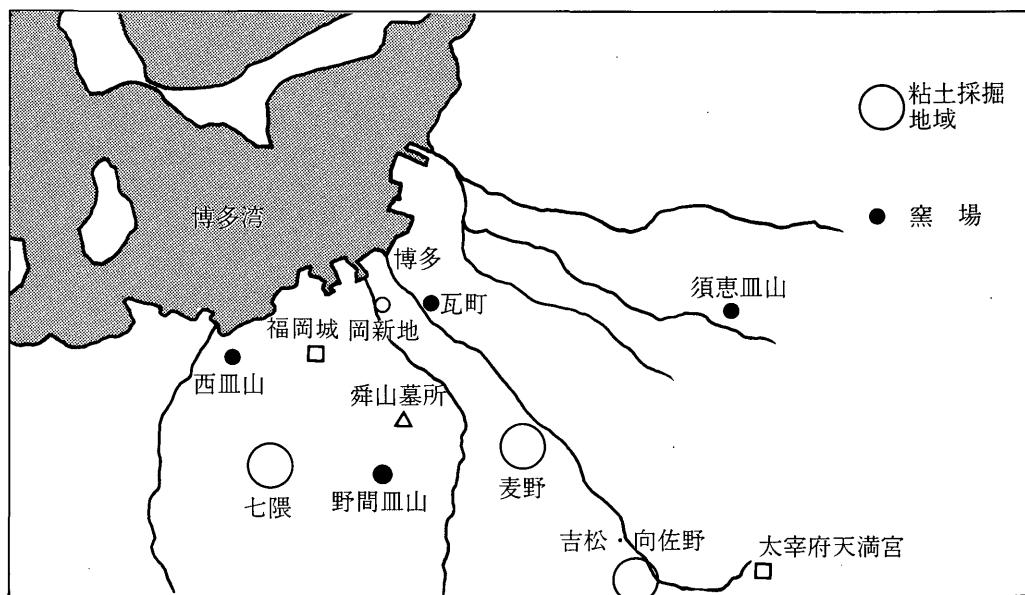
#### (1) 「福岡藩民政誌略」高取焼及西皿山焼、博多素焼物の起源 (註2)

「瓦町焼は瓦缶の類にて、神前に献る土まりを始め、雅人の用うる風爐、連甕及び日用の火爐糞缶等なり。中にもヒチリンと称するは、聖福寺子院虚白院の智首座が思得しより、始めて製せしものなり。今は戸毎に日々煮灸の用とする。他邦にも発売する事少なからず、此瓦缸の起源をしるせし書を見ざれども、瓦工の播磨より黒田氏に従い来し者を、博多の南辺に居らしめ、慶長六年築城の日、瓦を作らしめられしより、その居所を瓦町と名づく。その製瓦より他器をも発明せしと聞こえて、宗七と称せし良工も、播磨より来りし瓦工にて、正木氏なり。今は瓦町に隣れる祇園町、上新川端町にも、同製の瓦缸を成す。よりおもへば、二百年前後に起こりしならん。白焼と称するは、瓦町の　　(ママ) と称する者、文政、天保の頃、野間、高宮の白土を以て、始めて製す。又同地にて製する土偶人は文政の頃、肥後熊吉というもの來たりて、著色までも教えしに起る。

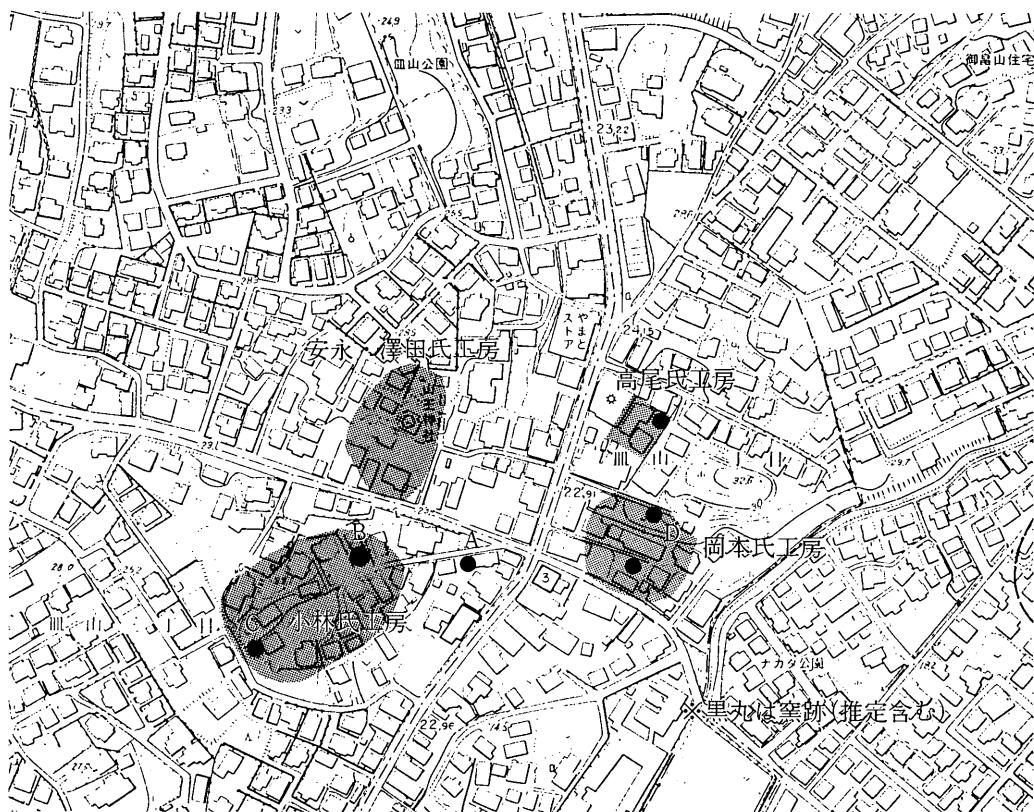
小石原焼と称するは、　　(ママ) 人天和中上座郡小石原村の支邑中野に来り、肥前の瓷器に倣ひて製造す。故に中野焼共称す。貞享中は皿山奉行を設て、藩用とし、頗る盛なりしに、享保の末より、改めて水瓶、酒徳利等を製す。工なれども僻遠の運送便ならざる地なれば、其近村の民に便りするのみ。寛政年は陶工八戸、窯3区ありしと聞ゆ。

西皿山焼は享保三年小石原に居し陶工数人を、早良郡龜原村に移らしめられる。元の如く民用の擂盆、水缶、井垣、夜壺の類を製す。寛政中は陶人二十七戸、窯を三処に設けたり。藩より陶戸に本錢を貸して、その成せし器を収む。奉行を置きて、その事業を掌しめ、士庶の乞う者には、廉価を以てうりいださしむ。有司その利至微なるを以て、廃せんと譲せしかども、日用器べからざる器なるに、国製なくば他邦の高価なるを求めずば叶ふべからずして、諸人の憂とならんとて、その言を用いずして、今に至れり。(中略)

野間焼は那珂郡野間村の字柳河内にて製する日用下品の茶瓶等也。文政中国産会所を置かれし時、博多瓦町に陶窯を築き、須恵村の陶人を招き、野間の土を探り、龜品の瓷器を製せしめけれ共、幾程もなく廃しければ、國主の命にて、安政三年六月より、別に柳河内にて製することとなれり。」



第26図 江戸～明治の筑前窯業関連跡位置図



第27図 福岡市野間焼工房、窯位置図(1/4,000)

## (2) 「福岡市史」第1巻明治編 第四編産業第二章工業（註3）

「物名 陶器（土瓶、茶碗、ユキヒラ、丼鉢、瓶、擂盆、丼桶、植木鉢、素焼類は七輪、火鉢、火搔、炮轆等なり。）

産地名 那珂郡博多上新川端町、瓦町、社家町、下祇園町、同郡野間村の内柳河内、早原郡龜原村の内西皿山、柏屋郡須恵村等にて焼出す。

産額数量 明治十一年の産額は博多素焼七輪、火鉢、火搔、土瓶、炮轆の類七万八千七百十個、その価二千八百三十三円五十六銭とす。野間焼は土瓶、ユキヒラ、茶碗の類四万四千個にしてその価一千二百十円なり。須恵焼は土瓶、茶碗、丼鉢の類十八万個、その価二千四百円なり。西皿山は瓶、擂盆、丼桶、植木鉢の類二万五千個にして、その価二千円なり。総数三十二万七千七百十個にして、総価額金八千四百四十三円五十六銭なり。

性質功用 博多の素焼七輪、火鉢、土瓶、西皿山の瓶、擂鉢等は粗品なりと雖も、人家日用のものにてその需要頗る多し。野間焼は京焼に擬せしものなり。

産地面積広 陶器製那珂郡博多十七戸、窯所一所に付凡そ十坪、同郡柳河内三戸、窯所二所共に横三間縦八十五間、柏屋郡須恵村窯所三百九十坪、早良郡西皿山窯所三所、内一所は九畝五歩、一所は一反二十七歩、一所は六畝歩なり。

自国消費 野間焼、須恵焼は悉く自国消費とす。博多の陶器生産額の二部、西皿山焼産額の八分は自国消費と見做す可きなり。

内国輸出 博多の陶器は大阪、馬関、越前、越中、越後、阿波、安芸、長門、豊前、豊後、筑後、肥前、長崎、唐津、肥後、壹岐、対馬等の諸国へ輸出す。その数は産額の八分と見做す可きなり。早良郡西皿山の陶器は馬関、肥前長崎等へ輸出す。その数は産額の二分とす。概して八分と見做すときはその価額六千七百五十円余なり。

外国輸出 なし。

費用賃金標準 費用賃金区々なるを以て詳かにせず。

事業人当標準 事業人当同右

沿革景況 早良郡西皿山は享保三年旧藩主の命にて設置す。明治の頃梢や衰微に及びしをまた、藩命を以て興起し、爾後格別盛大到らざれども、連続して現今も猶焼出す。柏屋郡須恵焼は宝暦年中設置逐年繁盛せしが、その後梢や衰微すれども現今の景況尚依然たり。又博多瓦町、祇園町は近世陶器製数戸となり、即今の景況最も隆盛なりとす。那珂郡野間焼は安政三年是又旧藩主の命にて興起するなり。現今の景況資金に乏しくして盛なるに至らず。野間焼の如き京焼に類して需要広し。蓋し資金を入れて拡張せば、将来盛大に至るべきと想像するなり。

## (3) 「市窯業研究所」（昭和4（1929）年3月27日 福岡日々新聞の記事）（註4）

「堅粕にあって、本市の持產品である高取焼、野間焼および博多人形を始め、各種窯業の改善発達を図る目的を以て、昭和四年三月設立を見た。同所は窯業に関し各種原料の品質試験、

輸出向硬質人形の製作試験およびタイル製作試験等を行う外、諸種の講習会又は講話会を催し、これら特産品の品質向上のため、不断の研究を続け、指導奨励に努めた。(中略) 近時欧米諸国に新販路を求めている博多人形を始め、駅売茶瓶を一手に製造する野間皿山焼並びに封建時代より有名なる高取焼をそれぞれ改善発達せしめて、現在の生産額総計約六十万円を更に大いに増加すべく、福岡市は市立窯業研究所を市内中の島に建設し、昨二十六日午後一時前記三種の生産団体肝入りで、火入式を兼ね研究所落成式を挙行し、市長、産業課長、市参事会員等列席した。

因に同研究所昭和四年度経費予算は九千八百八十八円である。」

#### (4) 「野間焼」(註 5)

「那珂郡野間村の陶器は、安政三年、藩庁より京都の陶工佐々木與三を招きて、陶業を起こすに創まる。明治十二年、與三の帰京に際し、同村澤田舜山が其工場を購ひ、日用雑器を製して、今に継続す。原土を同村柳河内に取り、釉薬は天草深江、其他五島のもの、及び本村近傍多尾村(註 6)の地より買収すといふ。(明治十八年の調査による、)

(イ) なほ参照するに、野間焼は安政三年六月、当藩主の命により、佐々木與三、横田與七の両人が那珂郡野間村の字柳河内に於て創製せり。京焼の類にして、土瓶、急須、茶碗等を製出す。近年来、其需要頗る多しという。

(ロ) 当窯は、安政四年、黒田家の御用にて開きしが、廢藩の際に止めり。かくて其時、従事せる京工佐々木與七の両人にて、之を継続したり。澤田舜山も栗田陶工にて、先に当國須恵村の製磁業のため、当藩主に招かれしが、廢藩後は須恵焼を自営せり。然るに明治十年、右佐々木與三兵衛の帰京に際し、其跡を引受て之に入れたり。(年代及び人名に小差を見るも、姑く略す。)」

#### (5) 「行平」(註 7)

「窯は福岡県筑前国高宮野間皿山。福岡や博多の裏通りの唐津屋によると、きっとこの行平を棚の上に見いだすであろう。今も盛んに作る。販路はもとより北九州一帯で熊本あたりでも見かける。この窯のことは本文に記載するのを洩らしたから、ここで短く語らう。福岡市内だが謂は郊外である。静かな陶郷で、仕事は三箇所に分れる。山の麓の一軒が石炭窯で汽車土瓶を焼くが、奥の二軒が行平だと土瓶だとかの雑器を焼く。土瓶は二種類あって、一つは明らかに信楽系統の山水絵の土瓶で、一つは、「いっちゃん描き」である。郷土色の濃い雑器である。ここに掲げた「行平」は後者の手法で、蓋にも胴にも横に黒の線を入れ、縦に白のいっちゃんを引く。もともと行平は土鍋であるが、この野間の皿山のものは最も特色あるものとして省みられていい。把手の作り工合も他では見かけない。寸法丈四寸八分、胴布五寸。ごく小型のも作る。」

#### (6) 澤田舜山墓碑銘文(註 8)

「翁姓澤田称舜山若州野多江之人也及成童就京師水劑家中村某陶工安田某極兩道之蘊奧有出藍之譽矣會鍋島公求水劑家中村師鷹翁在七年有大功又應」(以上左面)

「其末家氏之聘傅其兩道先是以有黒田公之聘來於筑前則全兩公之意黒田公以五口米給翁辭而不受焉如肥前伊勢屋丁筑前須恵陶場係翁之創業云後住野間垂休光於兩道實可謂偉也矣是以藩賞不可勝數明治二十七年九月三十日卒年七十七謚秋月院」(以上裏面)

「釋善教居士銘曰 道傳肥筑 釉窯是全 善哉称舜 功垂萬年 浦田重道撰并言」  
(以上右側面)

(7) 「野間焼 のまやき」(註9)

福岡市南区皿山の焼き物。1856年(安政3)福岡藩が京都の陶工佐々木与三、横田与七を招き、那珂郡野間村の字柳河内に製陶させたのがはじまりといわれ、製品は京焼の類で土瓶、急須茶碗などを産したという。別説には1861年(文久元)須恵皿山役所の管理のもとに野間の人安永与十を棟梁として八幡境内の山ろくに開窯したといわれ、製品は須恵焼と同様の磁器を産したという。ようやく発展しかけたころ、維新の変革にあい、1870年(明治3)廃窯となった。1860年(万延元)京都から須恵にきて製陶に従事名工といわれた沢田舜山は1875年(明治8)野間に移住し野間焼の復興につとめ精良品を産した。しかし努力も空しく廃窯のやむなきに至り、そこで陶器窯に改めて京都の門人小川平七郎に行平、茶瓶、土鍋、土釜、植木鉢などを製作させてその継続を図った。太平洋戦争直後まで数軒あった皿山も現在は岡本光山の一軒をのこすだけである。

(8) 「従二位黒田長溥公伝」(註10)

「公は追々藩士を長崎に派遣し、蘭人に就て、諸種の工事製造等の術を伝習せしめ、弘化年間博多中島に精練所を設置し、反射炉を設けて、礮物の試験、及び硝子製造、青貝塗、綿布、染粉等の工業を始し、又た京都より陶器師を招き、須恵、野間に於て陶器を製造せしめられしに、肥前の伊万里焼にも遜せぬ良品を製出せり。」

(9) 「福岡県地理全誌」野間村 (註11)

「野間村 (中略) 皿山。七戸。安政年中ヨリ此所ニテ瓷器ヲ製ス。故ニ名ク。佐々木與三ナル者良工ナリ。土ハ当村ノ内柳河内ヨリ出ツ。今窯二所ニアリ。(中略) 戸数六十二戸(中略) 職分 工男五人、女六人(中略) 物産 (中略) 土瓶壱万弐千八百 佐々木與三 横田與七製 此代金三百弐拾円」

註1、「博多出土の素焼人形 近世末の博多に於ける一手工業種の研究1」1988年(九州考古学第62号)にて同様の試みを博多人形についてもおこなっている。

2、「福岡藩民政誌略」明治20(1887) 年長野誠(「福岡県史資料」第1号に収容)

3、「福岡市史」第郡巻明治編 昭和34(1959)年 福岡市役所

- 4、「福岡市史」第4卷昭和前編（下）昭和41（1966）年 福岡市役所に収容
- 5、「日本近世窯業史」1921年（「日本窯業史総説」1991年柏書房 第5巻 収容）
- 6、長尾村の誤りか。
- 7、「現在の日本民窯」昭和十七（1932）年 柳 宗悦編 昭和書房
- 8、福岡市南区野間二丁目13番地の集団墓地の中にある。1992年2月山村調。岡本光山氏によると同業者によって建てられたもので、顕彰碑的性格のあるものという。
- 9、「福岡県百科辞典」1982年 西日本新聞社
- 10、「従二位黒田溥公伝（上）」明治29年 江島茂逸（「黒田家譜」第6巻上 1983年文献出版に収容）
- 11、「福岡県地理全誌」巻119那珂郡之6 明治15年

## 考古資料

現在、野間皿山で窯業関連の遺物が散布しているのは皿山2丁目と3丁目にまたがる4つの地点、第27図中のA、B、C、Dで確認され、中でもAとB、Cには窯体の残骸が見られ、Dは現在も操業中である。

### (1) A 地点の遺物（第33図1・2）

A地点は皿山3丁目1番地にあり現在駐車場として利用されている。後述のB地点のある丘の裾部にある。

遺物はレンガ様の窯体の残骸に混じって行平の把手、灯明皿、電力用高圧碍子が見られるが、概して破片が小さい。碍子には企業のロゴらしい菱形のマーク、「JAPAN」、「250V」など青色でプリントされている。この碍子がここで生産されたものか否かは不明。

### (2) B 地点の遺物（第28図、第29図、第32図1・2、第34図1・2・3）

B地点はA地点より南西に30メートルほどいった丘の中腹あたりで北側に小さな祠がある。1991年夏頃から家屋の建て替えに伴って多くの遺物が出土している。聞き取り調査によると戦後しばらくここで小林姓の窯元があったという。

遺物の種類は把手の型（1、2）、燈火具（4、5）、染め付け磁器の小皿（6）、陶器の蓋（8、9、10）、行平（11）、把手、窯道具のサヤ（12）、用途不明のもの（13）などがある。第28図3の把手は太宰府市水城跡第18次調査で出土したもので「小林製」の浮き彫りがあり、参考品として掲げた。

把手の型は素焼製で、2枚合わせのもので、この型から打ち出される把手の長さは6.5cmほど（焼成後は1～2割小さくなると思われる）。一つには「豆」の字が浮き彫りされる。把手の先端部が開いており、芯棒を入れたものか型抜きの際の範を当てるための隙間であろうと思われる。製品の先端も穴が開いているものが多い。

燈火具はワイングラス型で硬質陶器（第28図4）と素焼状態（第28図5、第34図1・2）の二者がある。後者は未製品か。

染め付け磁器の小皿は、山水風の図柄を持ち3箇所以上にハリの目跡がある。搬入品か現地産かは不明。

蓋の類はつまみが乳頭状、環状、付け紐状の3タイプが見られる。茶瓶（第28図7・9、うち7は素焼のまま）と行平（8・10）の2種に分けられるのであろう。釉は全体に薄く青味がかかった透明釉が、縞、斑点状に茶色味を帯びた黒色の薬が施され、その上から放射状に白色土を用いた「イッチン描き」が施されている。

行平も装飾については蓋と同じで、口縁端部の内側だけ釉がふき取られている。胴部内側にはクロ口目が残ったままである。復元口径は14.3cm。伝世品を見ると口縁下に穴を穿ち注ぎ口

が取付き、口と90度の位置に把手が取り付く。底はゆるやかな平底で釉はからない。

窯道具には大型のサヤ（第29図12）と小型の円環状のもの（第34図3）、用途不明の延べ板状のもの（第29図13）があり、大型のサヤは複数出土している。このサヤは楕円の箱型で長さ30cm、幅18cm、高さ15cmほどの法量を持ち、口縁に2箇所で半円形の削り込みを施す。体部外面に口の字のヘラ書きが入る。胎土はごく目の荒い土が用いられる。

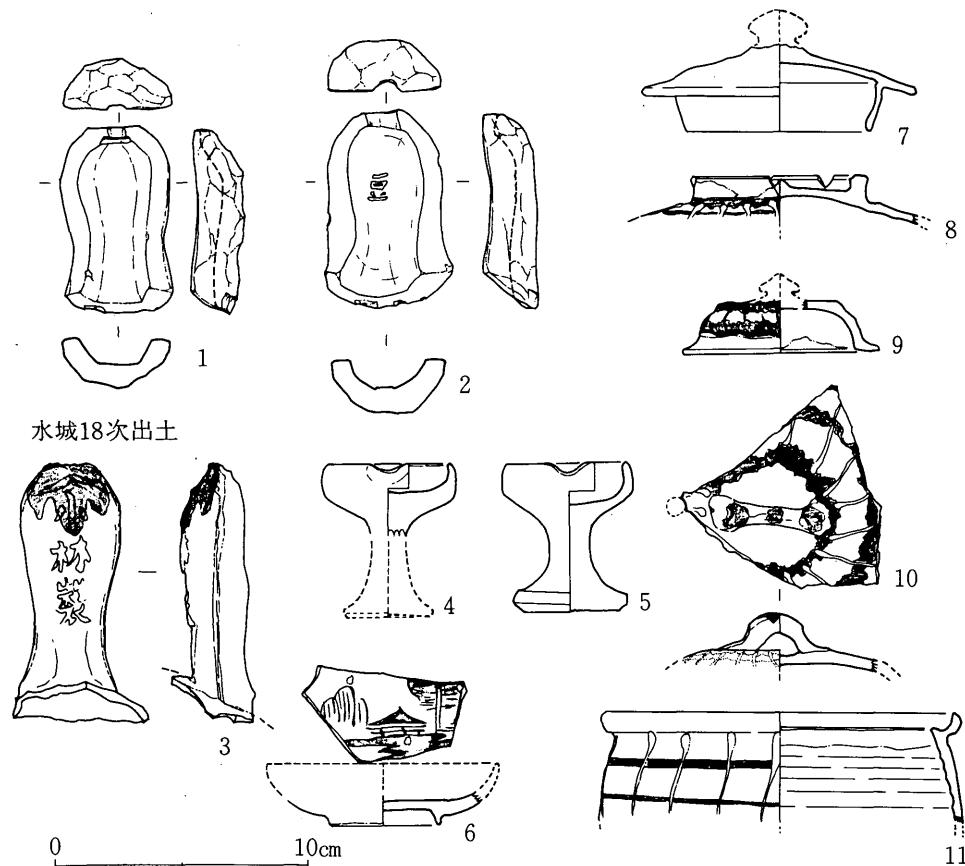
### （3）C地点の遺物

C地点は皿山3丁目2番地、B地点のさらに南西の丘の反対斜面側にあり（第27・35図）、現在もレンガで組まれた窯体の一部が残っている。

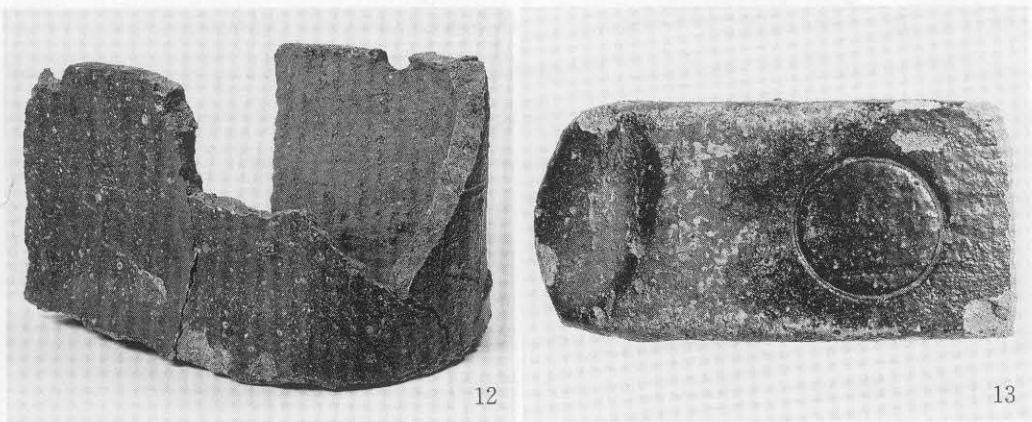
出土遺物は細片ばかりで図化していないが、素焼製品がほとんどで人形も含まれている。

### （4）西花畠公民館収蔵品（第35図）

皿山1丁目山王神社の境内にある公民館には主に、岡本家で製作された大正期以降の製品が収蔵されている。解説には伊賀土瓶（2種）、鐵道茶瓶（大正2年以降）、ミニチアままごと用台所道具、白焼（土師器）のお神酒指しなどがある。中でも鐵道茶瓶は徳利形を呈すもので、

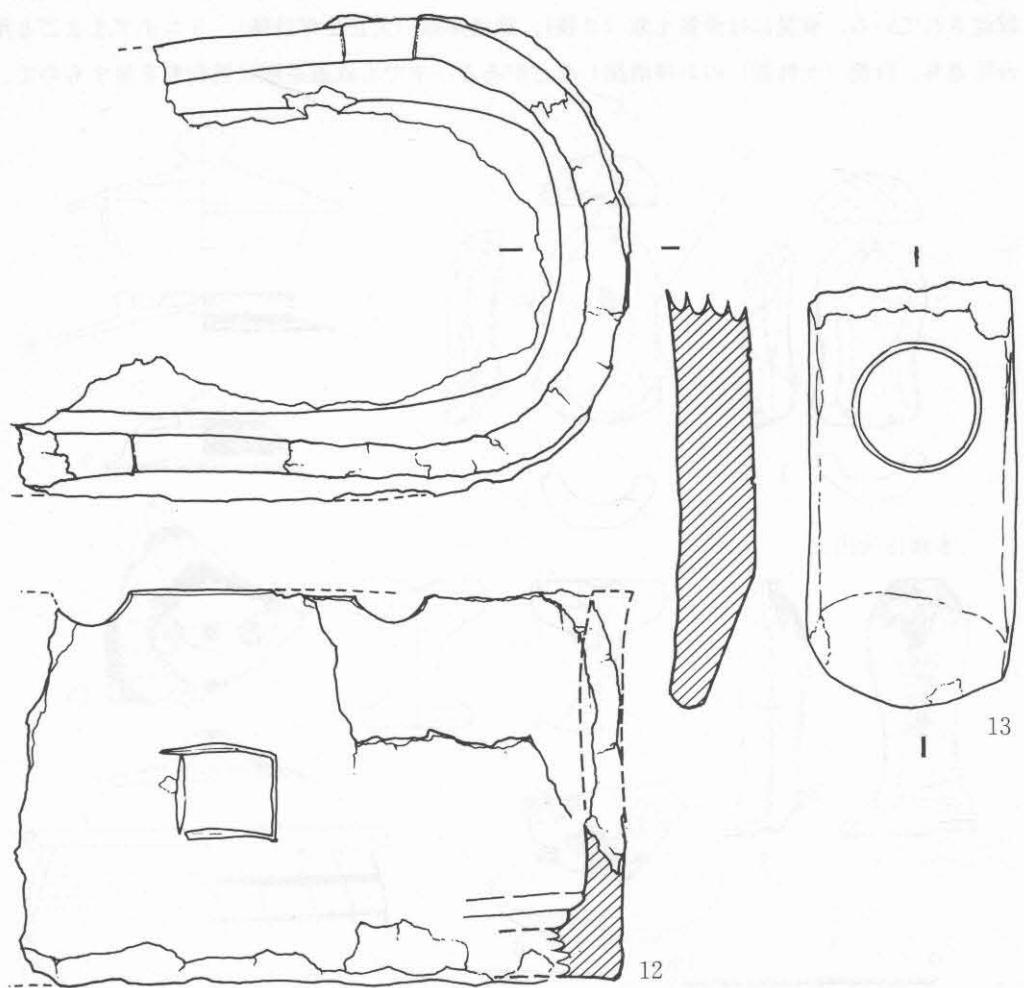


第28図 福岡市野間皿山B地点出土遺物実測図(1/3)



12

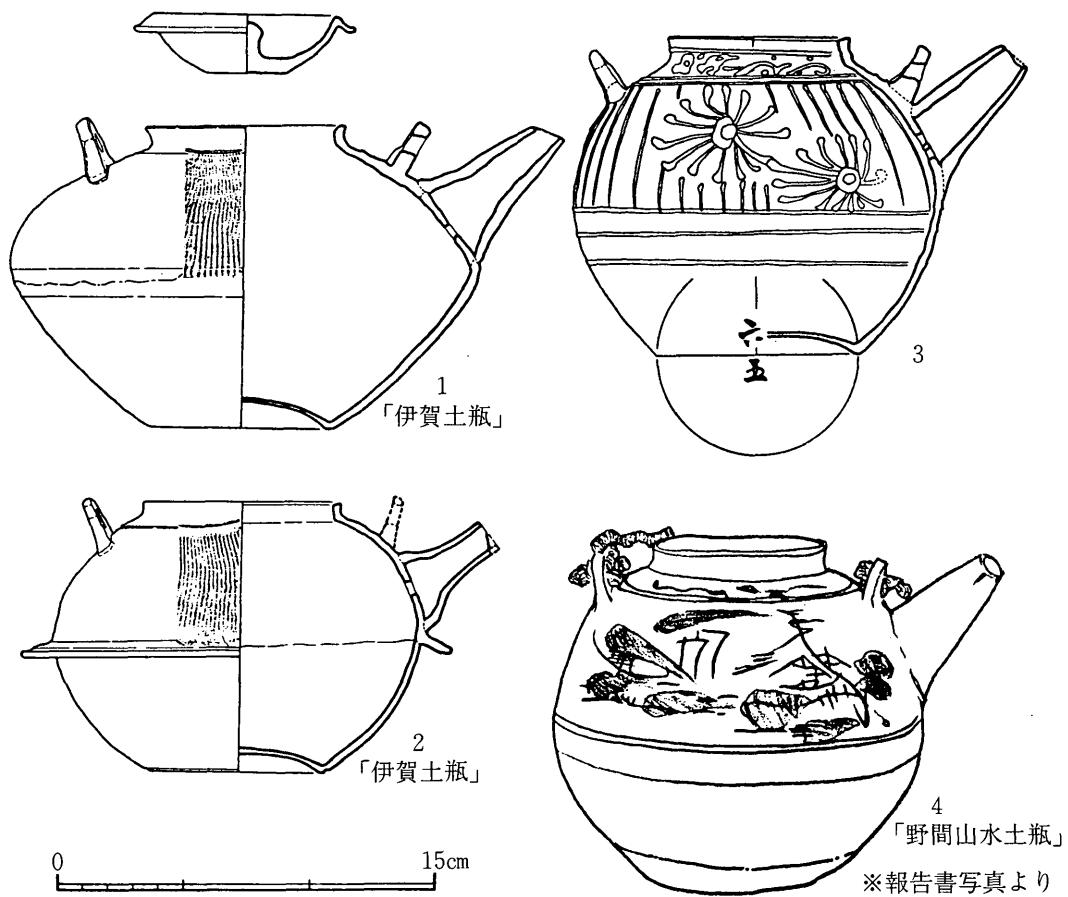
13



12

13

第29図 福岡市野間皿山B地点窯道具実測図(1/3)



第30図 春日市門田遺跡近世近代墓地出土の野間焼土瓶類

同種のものの中でも古期のものであろう。

#### (5) 春日市門田遺跡集団墓出土遺物（第30図）

山陽新幹線の車両基地建設に伴って福岡県教育委員会によって調査された明治期の墳墓を含む「近世墓」地で、出土した野間焼製品と思われる物は7個体、4種類の土瓶である。これらは後産埋納容器として埋められたと解釈されている。

第30図1は算盤玉形の胴部の上半に跳びカンナが入る「伊賀土瓶」と呼ばれている土瓶、2は胴部中央にヅバが付くもの、3は「イッチン描き」の圈線と花文様を入れるもの。4は黒、茶、緑で船、小屋、松などを描く「野間山水」と呼ばれる土瓶である。

いずれも遺跡の状況から明治時代のものである可能性が高い。

「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」第9集 1978年 福岡県教育委員会に収容。

#### 資料の総括

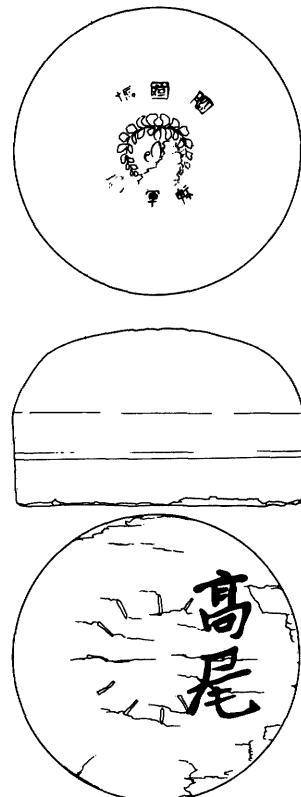
野間焼の草創については文献資料の中で異同が見られ、当地野間で操業する以前に文政もし

くは弘化年中に、福岡藩が博多中嶋町（岡新地）に設置した国産会所（精練所）と共に新たに博多瓦町に陶窯を築き、須恵焼の工人を招請して、野間の土を用いて肥前写しの上手物の磁器を生産した（文献1. 8）。その後の安政3年に野間に窯を移し、京都の陶工佐々木與三、横田與七が藩によって招請され、京焼に似た土瓶、急須、茶碗などの日用雑器を主体的に生産した（文献1. 4. 7）とする説。まったくの別説として文久元年に須恵皿山役所管理の元、地元の安永与十が文久元年に磁器を生産したことが挙げられる（文献9）。ともかく野間焼の創業は福岡藩が幕末におこなった殖産興業政策に基づくもので、磁気を生産していた須恵焼を母体とし、一方で京の陶工を招請することで京焼の陶器生産技術（生産そのもの）を移入した。幕末の博多での京焼の土瓶、行平などの陶器の需要は大きく、「博多店運上帳」（註1）によれば博多綱場町に京焼を専らに扱う小売店まであった。明治時代になると複数の窯場が開かれ生産も拡大した。この時期の製品が春日市門田遺跡の遺物であろう（考古資料5）。

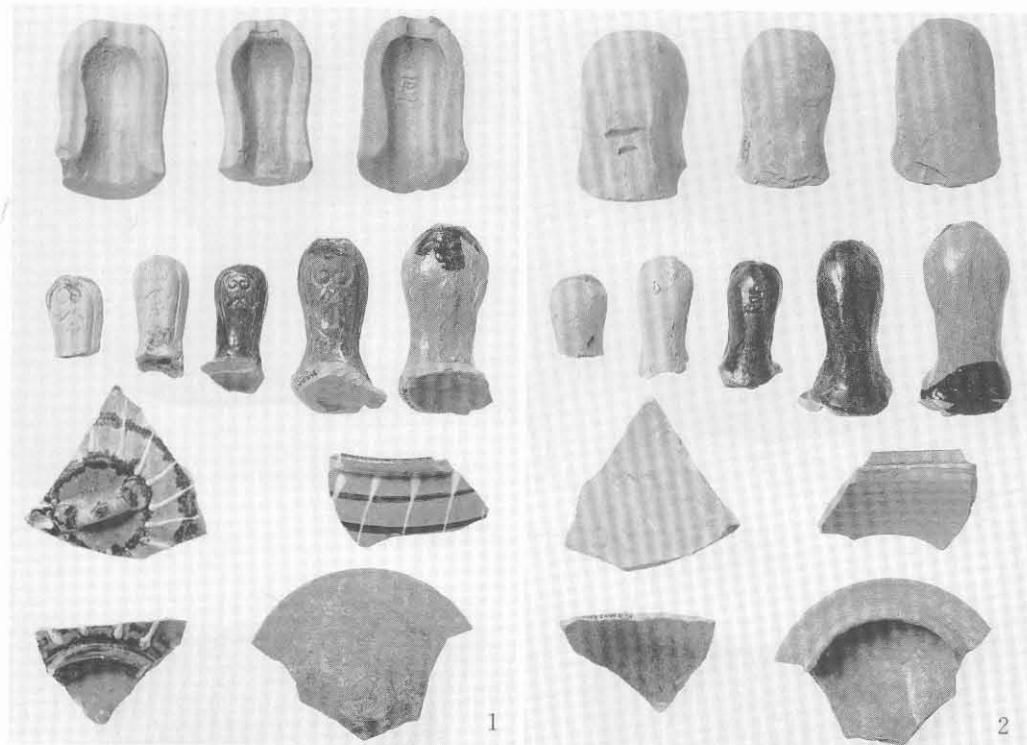
また、大町遺跡表土出土の土師器に見られるように、博多瓦町でおこなわれていた素焼物の生産も取り込んでいた。このことは都市消費のための窯業生産を都市の中で賄うという中、近世的な生産体制から脱する方向で野間焼の窯場が設定されたことを示唆している。（博多瓦町の瓦生産はすでに江戸中期頃から近郊の柏屋、今宿、龜原、宰府などに拡散しつつあった。註2）

大正から昭和初期にかけては駅売茶瓶が多く生産され（文献3. 5）、その製品が西花畠公民館に残されている（考古資料4及び第35図）。野間皿山の鉄道茶瓶は門司鉄道管理局管内を一手に賄っていたといわれ、再度回収して焼き直して再出荷もしていた（岡本氏談）。なお、鉄道茶瓶は西新藤崎窯でも生産されていたようである（註3）。この時期の皿山は40軒近くが陶器生産に従事していたという（岡本氏談）。昭和8（1933）年には福岡、博多に通じる幅員8mほどの道路が敷設され、製品搬出が飛躍的に楽になった。（註4）また、地元行政（福岡市）が胎土や釉薬の研究、新商品の開発をおこなう窯業研究所を造り、博多人形や野間、高取焼の保護育成に乗り出したが、世界大戦に向け企業統制、物資統制が進む中充分な成果を出さぬまま消滅してしまう（文献3）。

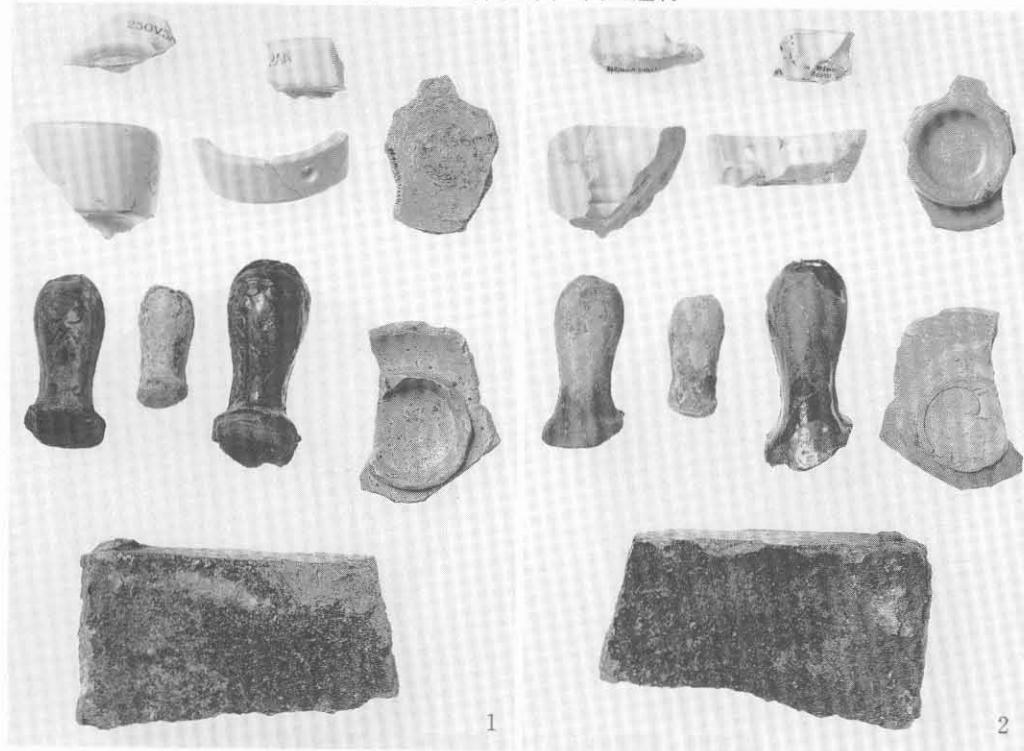
戦後の野間焼は野間焼を伝承する岡本光男氏の話によれば、復興に合わせて徐々に生産量を



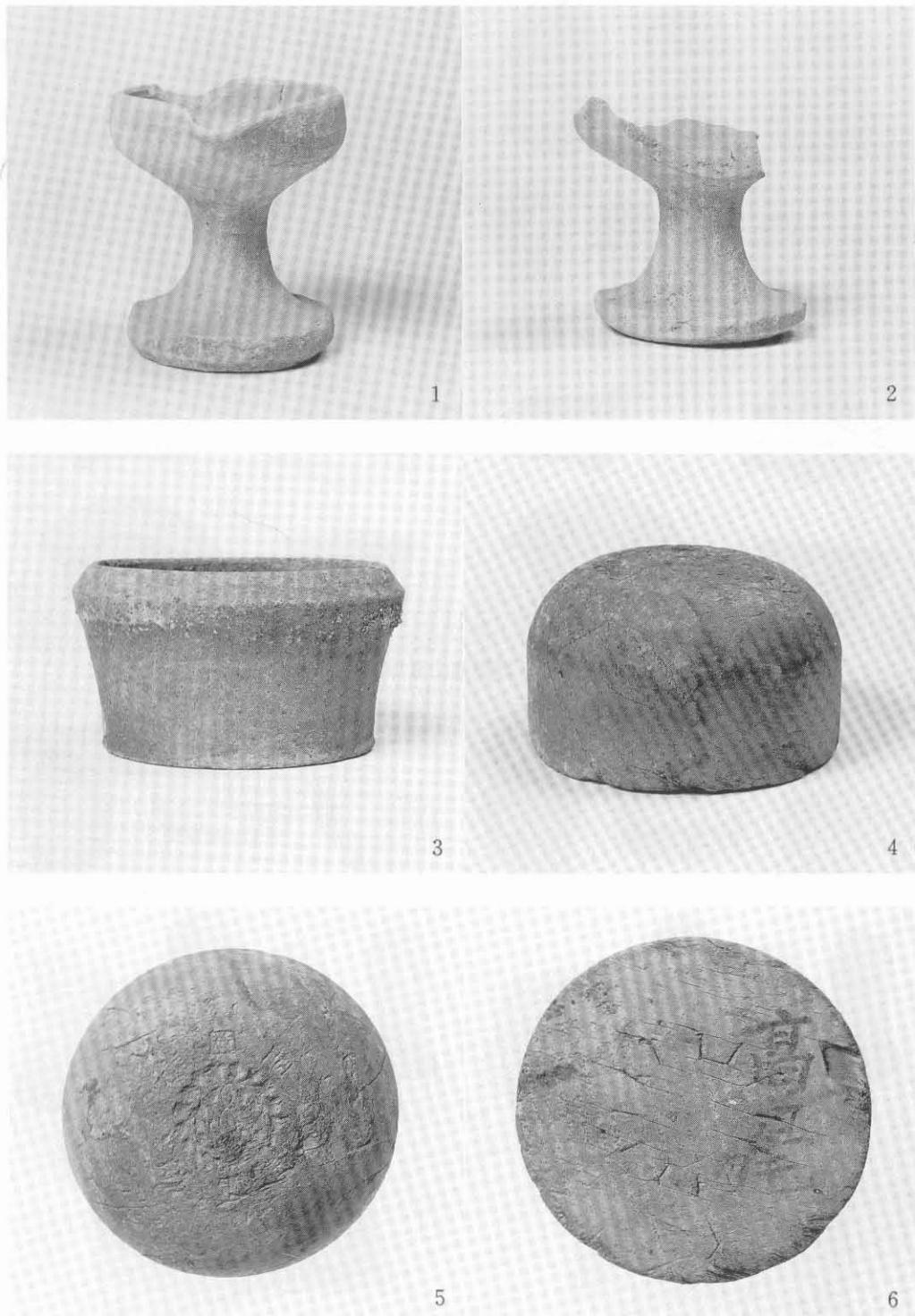
第31図 土師器皿造り  
木製内型実測図(1/3)



第32図 野間皿山B出土遺物



第33図 野間皿山A出土遺物



第34図 野間皿山B出土遺物及び土師器内型

回復していくが、農地開放で職業を変える者も多く、七輪の消失、ガスコンロ、ポリ製品の普及という生活様式の変化に伴い、野間焼の主力商品である土瓶や行平、駅売土瓶はシェアを失っていく。その頃、昭和20年代後半頃から、分業化し生産を拡大しつつあった博多人形の工房（生地屋を主体とする）が新たに進出し、本業の陶器生産も民芸運動の復興によって生活雑貨としての民陶が見直され、観光客が窯元を訪れるようになったが、生活様式の欧米化は更に進み、周辺も公共道路の整備に伴い徐々に宅地化が進行し原土採取もままならぬ状況にまで追い込まれ（現在は筑豊田川の土を使用）、沢田（陶器、磁器＝戦前に高圧電気用碍子生産、素焼）、小林、安永、木下（以上陶器）、高尾（素焼）家などに5、6箇所あった登り窯、空吹き窯も取り壊され、現在は岡本氏1軒になったという。

現在、岡本氏の工房には土瓶を形成するためのロクロと石膏の外・内型や土師器の木彫りの内型（第31図註5）などが残されているが、ほとんど使用していないという。

江戸時代後半の土器消費様式の変化によって成立した一手工業種が、その後の消費様式の変化に伴って商品を開発し、引き続いて生産を継続してゆくことは並大抵のことではない。野間焼の歴史のなかには磁器から京焼や素焼物、京焼土瓶から鉄道茶瓶、博多人形と、次世代の主力商品を産み、また、受け入れる土壤があった。今は後継者も無く、産業そのものがなくなりつつある。

（山村信榮）

註1 「博多店運上帳」（「九州経済史論集」1958年福岡商工会議所）

2 「筑前国統風土記付録」土産考、「長政公御入国より二百年家由緒記」参照。

3 「藤崎遺跡V」1990福岡市教育委員会藤崎遺跡第14次調査包含層出土遺物 P 69参照。

4 福岡市南区皿山2丁目1に道路施工時の顕彰碑が残っている。

5 博多で和菓子のラクガンの型などを彫っていた職人が、土師皿の内型を造っていたとい  
う（岡本氏談）。



博多仲間町の下澤商店（明治初期）

野間の道路敷設にも出資している。



▲野間皿山A、B地点



▲岡本光山工房(D地点)



▲野間皿山C地点



▲上工房内



▲西花畠公民館収蔵資料(中央2つが  
鉄道茶瓶)



▲伊賀土瓶と石コウの「型」



▲澤田舜山墓碑



▶口クロ台と「内型」「外型」



第35図 福岡市野間皿山関連写真